慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「経済表」の悲劇 : 渡辺輝雄博士の「書評」に質す
Sub Title	La tragédie du "Tableau économique"
Author	小池, 基之
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1988
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.81, No.1 (1988. 4) ,p.131- 138
JaLC DOI	10.14991/001.19880401-0131
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19880401-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」81巻1号（1988年4月）

研究ノート

「経済表」の悲劇

——渡辺輝雄博士の「書評」に質す——

小池基之

I

このたび東京経済大学名誉教授渡辺輝雄博士から小著『ケネー「経済表」再考』の書評を『経済学史学会年報』第25号（November 1987）に戴いた。教授は昭和37年『創設者の経済学——ペティ，カンティロン，ケネー研究——』によって京都大学から経済学博士の学位を受けられている，学界におけるケネー研究の第一人者である。博士から小著の書評を賜わることは著者にとって無上の光栄であるといわねばならない。

小著はケネーの「経済表」を「経済表」として二，三の考察をしたに止まるものであって，博士の如く広い視野に立ってそれを研究の対象としたものではない。したがって博士の眼を以てすれば極めて不満の多いものたることを免れぬであろう。私は，その広い視野からする博士の忌憚なき指摘を期待するものであったが，そこに極めて寛恕な叙述を見出したことは，却って些か物足りなさを禁じ得ないものである。ただ，「経済表」に対する私の「解釈」について，博士が「賛成できない」とされる表明をめぐって，その批判の論理については，私の十分に理解し難いところであるといわねばならない。

博士は，小著の内容についての簡単な紹介のあとで，つぎのようにいわれている。「著者のジグザグ表の解釈には賛成できない。ジグザグ表は，……単純再生産過程を表示する折半支出の均衡表とともに，『過度の装飾の奢侈』による縮小再生産過程を表示する不均衡表，さらに『食料の奢侈』による拡大再生産過程を表示する表をもその必然の構成要素としている。」（『経済学史学会年報』第25号，70頁。）

ここに「その必然の構成要素としている」というのは，どういうことなのであろうか。それは，「経済表」が設定している基本的条件のもとで，単に数字を入れかえれば，「拡大再生産過程を表示する表」が「構成」されるということなのであろうか。「拡大再生産過程」が，偶然的にではなく，必然的に，通例の過程としておこなわれるためには，生産者の手に，追加資本に転化させるべき剰余価値部分が，通例的形態として，存在しなければならない。これが私の，「経済表」を分析する場合の，基本的な考えである。もしこれが正しいとするならば，このような条件が基本的に見出されないところで，どのようにして「拡大再生産過程」が「必然的に」「構成」されるのであろうか。その論理は私の理解に苦しむところである。

「経済表」における循環の出発点は土地所有者収入の支出であった。そして土地所有者収入は，ケネーにおいては，剰余価値（=「純収益」）の唯一・通例的形態としてとらえられているところであった。もっとも，ケネーはこの「純収益」を生産する主体たる「富裕なフェルミエ」を考察するに当って，その経営を資本家的経営たるの性格をもつものとしている。

1756年1月『百科全書』（*Encyclopédie, ou Dic-*

tionnaire raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers）に寄稿した「フェルミエ論」（Fermiers, *écon. polit.*）において，ケネーはつぎのように書いている。「フェルミエとは土地を賃借し，農村の財貨を活用し，国家の維持に最も本質的な富および資源をもたらすところのものである。」「富裕なフェルミエは農民（paysans）に仕事をあたえその生活を維持する。」「フェルミエがいないところ，また牛が土地を耕しているところではどこでも，農民は赤貧に悩み，貧乏なメテイエはかれらに職をあたえることはできない。」小麦の耕作はかなりの時間と労働を要するので「この耕作はその費用を支出しうるフェルミエか，土地所有者によって援助されるメテイエのみのよく為しうるところである。更にメテイエは農業にとっては劣弱な手段であるが，フェルミエのいない土地所有者にとってはそれだけが唯一の方法なのである。フェルミエ自体が利益をあげるのはその耕作の優れていることによって，またその耕作する土地の質の良好なることによってのみである。その収穫が支出をこえる限りにおいてのみ儲けることができるからである。」「その耕地があるものは良い，あるものは悪いというような場合には，利潤はまずまずといったところである。」（*Encyclopédie,* Tome VI. pp. 528-529, 535-536.）

ケネーはフランス北部の，馬耕，大経営，fermage の地帯と，中南部の，牛耕，小経営，métayage の地帯とをふまえて，その詳細な比較検討の結果として，これを書いているのである。そしてそこからいえることは，まず，農業生産力は経営規模や耕作技術，借地条件等の問題にかかわるところであるが，これらを左右するのは，そこになされる資本の投下の大小であるということである。経営者に十分な投資能力がない場合には，土地所有者はその土地からの「収益」を高めるために，自らそこに資本を投下するか，その援助をしなければならないであろう。いずれにしても，そこにおける「純収益」をあげかつそれを伸長させるためには，農業生産力を維持し，増大させることが根本条件なのである。かくて，馬を以てするフェルミエの経営は，貧困な零細農民を雇用し，土地所有者に地代を支払い，「利潤」をあげる経営というかたちで，とらえられ，「生産階級」の中心におかれることとなる。

しかしながら，ここで単に「前払」を回復するばかりでなく，更に追加投資にあてられるための「純収益」，あるいは「儲け」は，前述のところを以てすれば，何らか，一般の経営よりは優れた条件，たとえば地味の良い土地においてなされた経営，優れた耕作方法のもとにある経営等においてみられるところであった。そしてフェルミエの「利潤」は，当然のことながら，まずフェルミエの生活資料にあてられ，そして通常のフェルミエの経営にあってはそれをこえることはない。そこでは「利潤はまずまずといったところ」であるからである。かくて，生活費にあてられる部分は経営者にとっては経費であるから，「儲け」は経費の節約か地代関係の背後に例外的にのみ生ずるところのものとなる。「富裕なフェルミエ」（riches fermiers）が注目される所以である。

しかしながら「経済表」においては，このような例外的な「儲け」（超過利潤）はどこにも書き上げられていない。「生産階級」の中心におかれるフェルミエは等質のものとして設定されており，フェルミエの「利潤」はフェルミエの生活資料として，フェルミエ自身によって消費されてしまうからである。それはフェルミエにとっては経費であり，支出である。フェルミエによる生活資料の消費は自己の生産物の自己自身による消費であるから，それが総生産物に何程かつけ加えるとしても，それはフェルミエの消費によって相殺され，かくてその内部循環のなかで埋没してしまい，「経済表」においては，はじめから総生産額はそれを控除したものとして示される。フェルミエの「利潤」とされるものは「経済表」からはその姿を消すこととなり，「経済表」の表面にはあらわれることはない。

「経済表」において剰余価値を示す「純収益」はひとえに土地所有者の収入を形成するとされるところであり，剰余価値は地代において，それを唯一の・通例的形態として，実現する。このような関係のもとにおいては，追加資本に転化さるべき剰余価値を，フェルミエの手元に，通例的・必然的なものとして，見出すことはできないし，したがってそれが「経済表」のうえに明示されることもない。「経済表」が，追加資本に転化さるべき「拡大再生産過程」を「その必然の構成要素」とするためには，「生産階級」において，追加資本に転化さるべき剰余価値の存在が，「表」のうえに明示されなければならないと思うものであるが，それは無用の思い過しにすぎないであろうか。

「経済表」において，土地所有者の収入が「生産階級」と「不生産階級」とに分割されるという場合，それはあくまで「収入の支出」であって，それはすべて土地所有者の消費にあてられるところである。たとえその「支出」が「食料の奢侈」というかたちで「生産階級」に多くなされようとも，それだけでそれが「生産階級」，またはフェルミエの追加資本たりうるものではない。たとえば，土地所有者の収入600リーヴルが，「生産階級」と「不生産階級」に折半されるかわりに，前者に6分の1多く，後者に6分の1少く，すなわち「生産階級」にその12分の7，350リーヴル，「不生産階級」にその12分の5，250リーヴル，支出されたとすれば，それは，「生産階級」は土地所有者から350リーヴルの貨幣を受取り，「生産階級」の生産物のうち350リーヴル分だけ土地所有者の消費にあてられたということである。「生産階級」の手にうつった貨幣350リーヴルが「年前払」（生産資本）に転化するためには，「生産階級」においてそれに見合う生産物が，すなわち資本に転化さるべき価値が，見出されなければならない。しかし「経済表」の前提条件を尊重するかぎり，それは無理であろう。たとえ「生産階級」の手にある貨幣が多くなろうとも，再生産過程の出発点は，どんな場合でも，先行する生産過程の結果のうえに立たねばならないからである。剰余価値は土地所有者の収入として支払われた。土地所有者の消費，「不生産階級」の「年前払」の回収，およびその生活資料（「生産階級」の「原前払の補塡のための見返り）．「生産階級」の「年前払」の回収，そのあとに「生産階級」にのこるものは，「経済表」にはあらわれない「生産階級」の生活資料だけである。300リーヴルから350リーヴルに大きくなることを要求される「年前払」の追加分50リーヴルの生産物は「経済表」の表面にはあらわれない「生産階級」の生活資料を削るよりほか，どこにもない。しかも，土地所有者から「生産階級」への支出は300リーヴルから350リーヴルに増加し，それだけ土地所有者の消費にまわる部分は多くなっている。もっとも「不生産階級」に対する土地所有者の消費は減少しているので，それを以て相殺されるというかもしれない。しかし「不生産階級」の消費の削減は「生産階級」における「原前払」の補塡に支障を生ぜしめることになる点を無視することはできない。

一方，博士が「これらの不均衡表が著者の解説の立場から成り立ちえないのはむしろ当然であろう」（前掲『年報』70頁）といわれるとき，ここにいわれている意味を，「経済表」全体はそれを一つの過程と見るのではなくして，ジグザグの一つ一つをその過程としてとらえるべきであり，まずそこで生産されたものが消費され，「年前払」が回収・増大され，その結果が消費され，かくて「経済表」が進行すると解すべきであるとしても，同様である。第一の流通が円滑に進行するためには，土地所有者の消費のために350リーヴル，「年前払」の準備のために350リーヴル，すなわち，その過程の当初において「生産階級」はとにかく700リーヴルの生産物を用意していなければならず，それは先行する生産の結果を尊重するかぎり，「表」の表面にはあらわれないフェルミエの生活資料からの控除か，先行する循環における消費分からの

控除を想定するか，乃至は追加資本に転化さるべき剰余価値をひそかに持ち込むかしなければならないからである。

もっとも，土地所有者収入の「生産階級」への支出の増加，「生産階級」の生産物に対する市場の拡大は，「生産階級」の生産意欲を刺戟し，経営規模の拡大，農法の改善，技術の高度化等の積極的な推進に向わしめるかもしれない。それは，差当って「生産階級」の支出の節約によって，生活費を切り下げて「年前払」を増加することによって，なされるかもしれない。あるいはまた，肥沃度の高い土地を耕作する経営，乃至は優れた農業技術・生産設備をもつ大農経営において生み出される「儲け」の積極的な投資によってなされるかもしれない。

また「原前払」の「利子」(=「原前払」の補塡部分）は，個別的にみれば，「原前払」の更新や修復を必要とするにいたるまで企業内に蓄積され，時には不時の災害のための予備資金とされることもあるであろう。(Analyse de la formule arithmétique du Tableau Économique de la distribution des dépenses annuelles d'une Nation agricole. *Journal de l'Agriculture, du Commerce et des Finances,* Juin 1766. pp. 20-22.）また1768年2月に『市民日誌』(*Éphémérides du Citoyen, ou Bibliothéque Raisonnée des Sciences Morales et Politiques*) に発表された「フェルミエと土地所有者の手紙」(Lettres d'un Fermier et d'un Propriétaire, par M.A.) の第二書簡 (II. Lettre du Propriétaire à son Fermier) において，ケネーは「あなたはどの年もどの年もあなたの通例の消費以上にでる収穫の超過分をお持ちです。そしてそれは耕作者が曝されるかもしれない災害に備えるために貯えられております」と書いている。(*Éphémerides,* 1768, Tome seeond, Première partie, p. 93.）そこでこれらは，生産の拡張，経営の改善に当って，資本の追加投資の源泉として役立つかもしれない。

そしてこれらの，例外的な「儲け」や不時の出費のための蓄蔵を起点として拡大再生産をおしすすめることはできるし，また事実そのような形で現実には拡大再生産がおこなわれてきたことであろう。これらを現実の過程として考察することはできるし，またそれは必要なことでもあるであろう。そしてケネー自身も，すでに，このような形で農業生産の伸長をはかることを一つの課題とし，「儲け」を生み出す「富裕なフェルミエ」による大農経営に，期待をかけたのであろう。これらのことを私は決して否定するものではない。

しかし，これらは「経済表」に表示されるところではないし，また「原前払」の補塡部分は，個別的にみれば，その「原前払」の更新や修復にいたるまで企業内に累積されているとはいえ，社会的にみれば，その累積がつねに「原前払」の更新や修復に用いられていると考えなければならない。そこで，与えられた「経済表」の分析のために「表」に表示されていないものを引き出し，それを以て拡大再生産過程の「表」にその「経済表」を読みかえることには無理があるといわねばならない。「経済表」はあくまで与えられた「表」として読むべきが妥当であろう。

「経済表」はその全過程を通じて「良価」(bon prix) の実現を前提としている。そこからすれば，フェルミエの生活費の切り下げはフェルミエの労働力の「良価」の実現とはいえないこと，明らかである。また経営規模の相対的に大きな経営，あるいは耕地や設備の優れた経営における「儲け」を以て「経済表」から「拡大再生産過程を表示する表」をひき出すとしても，それは，恣意的な要素を「経済表」のなかにもち込むことになるといわざるをえない。「拡大再生産過程を表示する表をもその必然的の構成要素と」するためには，どうしても，「生産階級」の手もとに，追加資本に転化さるべき剰余価値が，必然的に，形成されていること，したがってそれが「経済表」に明示されていることが前提とされなければならないといわざるをえないのである。

また土地所有者による「土地前払」(avances foncières)の支出を考えることもできるであろう。それは土地の肥沃度を高め，同額の「年前払」および「原前払」から，増大した収穫量をあげることを可能にするであろう。それは土地所有者による土地への資本投下であるから，土地所有者はその収穫量に対する地代の増額によって，その投下した資本額を回収するであろう。もちろんそれは，土地生産物に対する需要が絶えず存在していて，その供給量の増加が市場価格を引下げないかぎりにおいてではあるけれども。そしてこの「土地前払」の支出は，それによる収穫量の増加によって，フェルミエの手に何程かの「儲け」を，生活費をこえる剰余部分をもたらすかもしれない。しかしそれは偶然的な結果であって，土地所有者による「土地前払」の支出がつねに「生産階級」の「年前払」への追加支出と結びつくという必然性はない。

II

ケネーはまた「フェルミエ論」のなかでつぎのように書いている。「土地を耕すために馬を使うことができるのは富裕なフェルミエだけである。」「このような設備を手に入れることができるフェルミエを見出せない地方では」土地所有者はメテイエにその土地を耕作させるしかないが，「土地所有者はかれに牛と種子を与え，牛は仕事を終ったあとは牧場で飼育される。メテイエの費用といえば，耕作の道具とか最初の収穫にいたるまでの食料の支出とかであるが，土地所有者はこれらの費用の前払いをしなければならないこともしばしばである。」(*Encyclopédie,* op. cit., p. 529.) すなわち，メテイエにあっては，その耕作への土地所有者の関与は不可欠であり，不可避であった。しかしそれはフェルミエにあっても，程度の差こそあれ，全く否定されているわけではない。

ケネーが前掲，『市民日誌』に載せた「フェルミエと土地所有者の手紙」の第一書簡「フェルミエの土地所有者への手紙 (Première Lettre du Fermier à son Propriétaire) には，つぎのようにのべられている。「あなたは私が賃借している土地に泥灰土を施すことを約し，私はこの改良が達せられた暁には500リーヴルの借地料の引上げを取極めました。云々。」(*Éphémérides du Ciloyen,* 1768. Tome Seconde, Première Partie, p. 82.) ここでは労働条件としての土地はなお土地所有者から分離してはいないというべきであろう。

私達が「近代的土地所有」という場合，その指標とするところは，土地所有を支配・隷属の関係から全く解き放つということであり，更にはまた，労働条件としての土地が土地所有および土地所有者から全く分離し，土地所有者にとっては，土地があらわすところは，その所有によって産業資本家たる借地農業者から徴収する一定の貨幣額以外の何ものでもなくなるということである。これはまさに，資本制生産様式によって，それに相応するように転化された，土地所有の経済的形態にほかならない。ここで土地所有のうけとるものは，産業資本によって生み出された剰余価値の一部にすぎないものとなる。(拙稿「資本主義における土地所有の一般的性質」『三田学会雑誌』第54巻第2号，昭和36年2月参照。)

ケネーがその経済学において，また「経済表」において設定した土地所有の性格は，このような点を考えれば自ら明らかとされるところであろう。ケネーがフェルミエにおける「利潤」の形成を指摘しながら，究極においてはそれをフェルミエの生活費のなかに埋没させ，したがって，「純収益」は土地所有者の収入においてのみとらえられる，すなわち剰余価値は地代としてのみあらわれる，それを唯一・通例的形態とすると理解したのは，さきにみたような土地所有形態のもとにおける現実の反映であったのである。従ってフェルミエにおける「利潤」が現実に問題にされる場合には「儲け」として，すなわち「超過利潤」として，なんらかの経営上

の優位，すなわち土地の肥沃度，経営規模，馬による農耕と牛による農耕，二圃経営と三圃経営乃至は輪作経営等の農法の差にもとづくところのものとして，いわば地代関係の「背後」に生ずるものとして把握され，したがってそれは例外的なものとして，「経済表」の上には表示されえなかったのである。しかし私は，これらがフェルミエにおいて，追加資本への転化に役立ち，「前払」を増加せしめ，「純収益」の増加をもたらしうるであろうということを，否定するものではない。そしてケネーが，農業生産の発展に積極的に寄与する土地所有者，いいうべくんば「開明地主」(propriétaires éclairés) を，そして「大フェルミエ」(grands fermiers) を，危機に直面した絶対王制の再編・強化の経済的基礎においたのは，このような，観点からするものであったのである。「農業は君主の資産 (patrimoine) である。」(*Encyclopédie*, op., cit., p. 539.) それがケネーのいう「農業王国」(royaume agricole) であった。そしてまた，それが「危機」の克服のための「近代化」の形態として提起されたところであった。

しかしながら，ここで指摘しておかねばならない若干の点がある。

その1は，純理論的にいえば，ここではなお「利潤」は範疇として成立していないという点である。そしてそれは「不生産階級」が小商品生産者として，したがってそこでは生産物価値は「年前払」に生産者の「労賃部分」がつけ加わっただけのものとして，把握されていることと無関係ではない。そして，利潤が範疇として成立するにいたれば，地代はそれが剰余価値の唯一・通例的形態たることをやめ，地代と利潤の地位は逆転するにいたるであろう。

第2は，このような関係のもとで，ケネーが資本家的経営たるの性格をもつものとして設定したフェルミエをどのように位置づけるかという点に関するものである。さきにものべた如く，ケネーは「開明地主」と「大フェルミエ」を解体期絶対王制の再編・強化の経済的基礎としたところであった。ところで，「ブルジョア化」した大土地所有，「市民的土地所有」(propriété bourgeoise) のもとでの，その土地の一括借入れによる「大フェルミエ」の形成は，イギリス農業の近代化の成果をふまえて，それを自らの生産力展開の綱領とするものであった。それはボース (Beauce) 出身のデュアメル・デュ・モンソー (Duhamel du Monceau) によるタル農法のフランスへの導入等の果した役割を省みても明らかなところであろう。それがフランス農業の「近代化」の一形態であったのである。

ところで，「大フェルミエ」展開の中心地帯，いわゆる「北部」型について，ジョルジュ・ルフェーブル (George Lefebvre) によって二つの類型とされたボースと北ガティネとの対比は，うえの問題を考える手がかりを与えてくれるように思われる。

元来，「大フェルミエ」，「豪農」(gros laboureurs)，「農村の商人」(laboureurs-marchands) 等は，領主権の徴収請負，貴族・教会・市民の土地の独占的借受け，生産物の市場独占等による貨幣の集積，あるいは手工業の問屋制的支配との連繋を「利潤」抽出の場とする等 (湯浅赳男『フランス土地近代化史論—近代化と共同体—』97-98頁)，そのかぎりにおいては，前期的性格を強くもつものであったが，農業経営の発展や新農法の導入に深い関心をもつ地主の「開明化」とともに，それと結びつく「大フェルミエ」は，共同体諸権利を自らの有利な関係において自己の経営にとり込むことによって，共同体的諸関係に強く依存せざるをえない下層農民との対立を，この面で深めていくことになる。また，同じ大農経営優越地帯とはいえ，ボースよりは土地集中の進んでいない北部ガティネにおいては，「この地方の毛織物工や麻織物工がボースにおけるようにオルレアン市の商人の問屋制支配に服していなかった」ことが指摘されている。(湯浅赳男，同上，106頁。) そして「この地方においては『大借地農』の市場独占が切実な問題として提起されていない。」(同上，108頁。) これ

に対して，ボースでは「はやくから『小作地の集積』が進行していた。」「しかし，18世紀に入るとこのような地主的集中にかわって，一人の『大借地農』の手に二つあるいはそれ以上の小作地が独占される傾向がつよくなってきた。」そして「『大借地農』がその手に集中していたのは小作地ばかりではなく，教会十分の一税や封建地代の請負によって村の収穫物をほとんどその倉庫にしまいこみ，穀物取引の自由からしこたま儲けたのも彼らである。こうした土地，生産物，貨幣の独占を挺子として『大借地農』は村民をその支配下にくみいれて，村の総代syndicではないにしろ共同体の運営をほぼその手ににぎることができたのである。」（同上，109頁。）市場の独占をはじめとする，流通過程を通じての貨幣の集積，利潤の蓄積といった，「前期的」性格がここでは強くみられるのである。ボースと北ガティネとの間にみられるこのような差異は，そこで進行しつつある農民層分解の形態と深度の違いによってあたえられるところであったといっていいであろう。「『市民革命』における階級対立」において，ボースでは自営農民（laboureurs）が，農民大衆とともに，「大フェルミエ」に対立したのに対して，北ガティネでは自営農民は「大フェルミエ」と結んで下層の貧農と対峙したという事実（同上，107頁）が，これを明らかに示している。

ケネーは「資本」の前期的形態による蓄積を極度に排除したことは，今更いうまでもないことであろう。ケネーは以上のような現実を眼の前にして，生産的基盤を確固たるものとするための施策によって「純収益」の増大，富の蓄積を図るところのフェルミエを「生産階級」の中核にすえ，それを，農業生産の発展に積極的に関心をもつ「開明地主」のもとにおいたのである。しかもなおそこでは「利潤」は例外的な「儲け」としてとらえられているところであった。

ところで，「大フェルミエ」が身にまとっている前期的性格を払拭し，それをして近代的形態をとらしめるものは，農民的商品経済の滲透によって促進される農民層分解の展開であった。そしてそれを阻止し，あるいは歪曲する要因として，そこに見出される土地所有の「性格」や「形態」を無視しえないとするならば，フェルミエの資本家的発展を，すなわち，そこにおける利潤範疇の成立を，可能ならしめるためには，何らかの形での土地問題の解決をかえりみないわけにはいかないであろう。土地所有は語の正しい意味で近代化されざるをえない。

渡辺博士は「書評」のなかで「『経済表』を『危機』の経済学と規定する著者の主張には賛意を表したい」と書いておられる。（前掲『年報』70頁。）

それでは，博士は「経済表」が設定する土地所有の性格をどのように考えておられるのであろうか。もしそれが，私が「開明地主」と規定した地主的土地所有であるとするならば，そこでは「純収益」は地代としてのみ実現するので，追加資本は例外的な経営が生み出す「胎芽的利潤」にたよるほかはないし，したがってそれを「経済表」の「解釈」にもちこむことは，「経済表」の枠をはみ出すことになると考えざるをえない。「経済表」をあたえられた「表」としてそこに設定された条件を尊重するかぎり，「拡大再生産過程をも表示する表をもその必然の構成要素としている」とするならば，さきにのべたように，その「表」は，まず「生産階級」において，追加資本に転化さるべき剰余価値部分が明確に「表示」されている，そのような構成をもたなければならない。

そこで，もしそのようなものとなったとするならば，「経済表」が「所有階級」として設定した土地所有は，その性格を異にしたものとならざるをえないといわなければならない。そこではもはや土地所有はその地主収入を「純収益」（=「剰余価値」）の唯一・通例的形態としては見出しえないからである。しかし，そうであれば，それは危機に瀕した絶対王制の経済的基礎たることをも止めることになるのではないだろうか。

私はそこに「経済表」が担わざるをえなかった「悲劇」を見ないわけにはいかない。

ケネーの経済学はスミスによる批判ののち，マルクスにいたるまで永く忘れられた存在となってしまう。フランスの経済学はケネーの直接的継承という形をとることなく，スミスを経由して，セー，シスモンディと展開することになる。

私は小著の冒頭に1862年6月18日付のマルクスのエンゲルス宛の手紙を引用した。そこではマルクスは，ケネー「経済表」の研究のために，イタリア式の簿記の範例をエンゲルスに求めると同時に，「私はとうとう地代問題を解決した」と書いているのである。再生産論の研究が「地代問題の解決」のうえに立つことを，まざまざと，思わせるものではなかろうか。

（1988年1月6日）　　（名誉教授）